
殺されたその先は

ハナモト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

殺されたその先は

【Nコード】

N6317Z

【作者名】

ハナモト

【あらすじ】

俺はある日、友人に呼ばれて家に行ったが、殴られたのか気を失ってしまった。気づいた時には縛られ、黒魔術の生贄にされてしまう。俺もまた、あいつの転生術に巻き込まれた 一話二千字前後、不定期更新です

01 黒魔術

「ん……」

頭が痛い。俺は意識を失っていたのか……？

「起きたか、真田」

聞き覚えのある友人の声。

ゆっくり目を開けて正面を見ると、底には確かに友人がいた。

だがその格好はいつもの彼らしくない、異様な格好。

何だ、その格好。

俺はそう言おうとしたのだが、言葉が出なかった。

理由はすぐに分かった。

猿轡をされている。おまけに自分の状態といったら椅子に縛り付けられ、後ろ手に縛られていて身動きもできない。

せいぜいあげれる声はうめき声ぐらいのものだ。

周りを見渡すとどこかの屋上らしい。空には満月が怪しく輝いている。

「いやあ、悪いな。そんな格好させて」

全然悪びれた様子もない。

「でもこうでもしないと抵抗されそうだからさ。もうすぐ……、もうすぐで終わるからな」

邪悪な笑み。悪寒が走った。

何でこんな状況になったんだっただか……

こいつと初めて出会ったのは確か、中学生の入学式。

あいつは両親が死んだばかりで荒れていた。

そんな時に知り合い、そして仲良くなった。といっても俺が一方的にくっついていただけだ。

あいつも最初のうちは鬱陶しがっていたが、段々と心を開いてくれるようになった。

高校生になり、あいつに彼女が出来るかと完全に立ち直っていた。

しかしそれも長くは続かなかった。

あいつの彼女が死んだ。

交通事故だった。

それからだ、あいつがおかしくなったのは。

何かを黙々と調べ始めた。何を調べているのか訊いても教えてもらえなかった。

だがそれでも俺はあいつにくっついていた。

寂しそうだっただから。

悲しそうだっただから。

助けたかったから。

そう思ってたから。功を奏したのか、急に今日呼ばれた。

何だろうかと思いつつもあいつの家に入り、待っていると見せたいものがあると言われた。

俺を前に歩かせたことに不審なものは感じたが、特に気になることも無かった。

だがそこで俺の意識は途切れた……。

「明日、何の日か覚えてるよな？」

こいつの彼女の命曰。

「そうか、覚えてたか。もうすぐだ、後五分ぐらい」

だから何だ。

「俺さ、今までいろいろと調べてたんだよ。死者を生き返らせる方法。」

生き返らせる？ 馬鹿な。

「ああ。今にして思うと俺も馬鹿だと思うよ。全く別の方法を使えばよかったんだ」

……全く別の方法？

「そつだよ。俺があいつのところに行けばいいんだよ」

気持ち悪いぐらい邪悪な笑み。あいつは今、黒いローブに身を包んでいた。

あいつの手の中でギラリと月光に反射して何かが光った。分かったくない。

「黒魔術でいろいろと調べてたんだよ、俺」

黒魔術だと？

「そつ、黒魔術」

あいつは満足そうに頷いた。

「あれは本当にすばらしい技術だよ。でも成功率が結構低そうだね。特に生き返らせる術なんてさすがに成功するとは思えなかった」

そりゃそうだろ。死んだら生き返らない。

「その通り。……相変わらず本当に君の目は心の中が読みやすいな。まあいいや。俺がいたいのはさ、生き返らせるんじゃないくて、俺の方から恵のところに行くって方法なんだな。記憶があるまま生まれ変わる。転生ってやつな」

恵。あいつの彼女の名前。本当に愛していて、大事にしていた女性。

「お前はさ、世界がいくつもあるって信じられるか？」

世界がいくつも？ パラレルワールド？

「似たようなものだと思う。とにかく全く別の世界。そして死んだ日によって次に生まれ変わる世界が決まる」

興奮しだしたようで、鼻息が荒くなり始めた。

「つまり、明日！俺が死ねば！俺が恵のところに行けるということだ！」

そう言つと友人は……貴紀は月をバックに高笑いをし始めた。狂つていやる。

「いいや！ 狂ってなどいない！ 狂ってなどいない！」

貴紀が叫ぶ。しかしその様子は狂人のそれにしかみえない。
あいつが右腕に付けた腕時計を見た。

「さあて、時間だ！ 時間だ！」

くふふと気味の悪い笑い声をあげている。

「そついや、お前をしばっている理由、言ってなかったな。せつか
くだから一緒に連れて行ってやろうと思ってさ。俺達、親友だろ？」

何言つてやがる……

「まあ理由はそれだけじゃないんだな。元々この儀式つてさ、生
贄がいるんだわ」

生贄……

「生贄って言っても、そいつも一緒に移動はするんだけどな。しか
も同じように記憶を残したまま」

だからって生贄になってたまるか！ 死ぬなら一人で死ねよ！

「冷たいな、俺達親友だろ？ なら付き合ってくれるよな」

貴紀がナイフを俺に向けた。

段々とナイフの切っ先が近づいてくる。

「色々悪いな。生贄をやれば向こうで体を選べるんだわ。……俺は今度こそ、大事な人を守る力が欲しい」

最後だけ真剣な表情、真剣な声音で囁くように言った。

だからといって死ぬのはごめんだ。

だが体は動かない。

椅子を倒そうとしても、固定されているのかうまくいかない。ナイフの切っ先が触れた。

最初はチクツとしただけだったが、すぐに激痛へと変化した。

ナイフが俺の肉を切り分けながら、進んでくる。

真っ直ぐに、心臓に向かって……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6317z/>

殺されたその先は

2011年12月21日01時46分発行